

# 言語連想検査における刺激語の性質と反応時間に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4744">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4744</a>

# 言語連想検査における刺激語の性質と 反応時間に関する一考察

奥田 亮

臨床心理学専攻講師・カウンセリングセンター相談員

## 要約

本学心理学科の学生237名を対象とした言語連想検査における反応時間について、先行研究と比較した上でその特徴について100の刺激語との関連から分析を行った。その結果、i) 反応時間の遅延には、先行研究と同様に情動刺激語が関わっていたが、本研究では殊に対人間で生起する否定的評価や自尊感情に関わる単語が刺激語である場合に顕著な遅延が認められた、ii) 抽象名詞が刺激語の時には反応時間は増加し、具体名詞の時には減少した（この結果も先行研究と一致していた）、iii) 同音異義語を持つ刺激語が反応時間を遅延させる可能性はあるが、むしろそれを持たない情動刺激語の方により反応が遅れる傾向がある、といった特徴が見られた。これらが本学学生のような青年期女子に強く見られる特徴なのか、より一般的な事象であるのについてはさらに検討が必要であり、今後この点に考慮して、刺激語の情動刺激性や品詞を統制しデータを採取していくことが重要であると考察された。

キー・ワード：言語連想検査、反応時間、刺激語、情動刺激性

## 問題・目的

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科では2002年から2年間、2回生配当の人格検査に関する必修授業の中で、言語連想検査を実習素材の一つとして扱っていた。すなわち学生が実際に言語連想検査を体験し、自らその結果を反応時間を中心にグラフにまとめ、分析をするという実習を行っていた。本研究では、これらの言語連想の反応時間のデータをまとめて分析し、言語連想検査について、特に刺激語と反応時間の関連性を中心とした基礎的な資料を提供することを狙いとした。

### (1) 言語連想検査とは

言語連想検査とは、あらかじめ定められた刺激語を呈示された被検者が自由に連想した言語的反応やその反応時間を分析することで、被検者の心理、特にコンプレックス<sup>1</sup>を理解しようとする検査である。言語連想検査は当初、知的側面の研究としてゴルトンが発案し、ヴントによってさらに開発された（Stevens, 1994/1995；Samuels et al,

1986/1993）という。ユングはそれを連想時間という形式的分析の重視やコンプレックス理論からの理解で発展させ、現在日本において臨床心理学で言語連想検査という場合、多くはユングの用いた連想検査の形式を指す。なおユングが言語連想検査の研究に没頭したのは、精神を病んだ者の内部で一体何が起きているのかを知り、彼らの妄想や幻覚や身振りが単に「狂っている」のではなく、心理学的な意味に満ちていることを明らかにするためだったという（Stevens, 1994/1995）。

ユングは言語連想の研究をまとめ（Jung, 1905/1993；Jung et al, 1904/1993）、そこからおおよ言語連想に関して次のようなことを主張している。すなわち、言語連想への反応には被検者の教養や刺激語の品詞などが関わっているが、特に感情的色あいを帯びたコンプレックスが関与すると、語音連想<sup>2</sup>が生じやすく、反応時間が遅れ、再生率が低下する。その影響は、引き続き反応にも及ぶ。また、反応のタイプに客観的タイプと自

我中心的態度<sup>3</sup>が見られるという。その他、いくつかの事例を挙げて、ユングは言語連想によって見出されたコンプレックスの働きについて考察している。

サミュエルズ (Samuels et al, 1986/1993) によれば、その後言語連想の研究は認知的な側面から盛んになされたものの、臨床場面ではあまり用いられておらず、それはコンプレックスについての基本的な理解が臨床家にあれば、検査を用いずとも何が問題になっているかを理解できるためである、と述べられている。この状況・事情は日本にも当てはまるようで、少なくとも臨床場面で言語連想検査が用いられていることを聞くのは極めて稀である。

## (2) 日本における言語連想検査の研究

次に、日本における言語連想検査の主要な研究を以下に取り上げる。

まず言語連想に関して多面的に検討を加え、刺激語の標準化を行って人格検査として確立させようとした戸川・倉石 (1958) のグループによる一連の研究がある。戸川らは言語連想に関する先行研究を踏まえ、刺激語を名詞に限定して標準化した上で、連想態度によって反応を分類し、反応時間、感情反応、連想反応の恒常性や平凡反応、知能との関連について分析を行い、また連想の臨床的な側面についても検討している。これらの研究には、言語連想検査をコンプレックス診断のためではなく、「精神発達における連想様式の変化」などを捉えることも含んだ、かなり包括的な人格検査法として確立させようとする狙いがあったようである。しかしながらこの一連の研究で標準化された刺激語は、その後の言語連想検査あるいは言語連想の研究で一般的に用いられるようにはなっていない。それが言語連想の人格検査としての限界を示すものなのか、やはりコンプレックス理論を用いる必要性があったのかは、ここでは詳しく検討しないが、今後考えるべき問題であろう。

その後の研究では目的に合わせて連想検査の手続きをアレンジしたものが多く、大きく分ける

と、言語連想検査あるいは連想過程自体を研究対象としたものと、検査を手段として用いたものに区別できる。

前者では、川幡 (1979) が連想反応時間を直後、3秒後、10秒後に統制して、各条件下で連想の形式が範列連想 (刺激語と反応語が置き換えられる関係の連想) と連辞連想 (刺激語と反応後が組み合わされる形の連想) のいずれが発現しやすいかについて実験を行っている。その結果、刺激語が形容詞の場合は反応時間が短いと範列連想が、長いと連辞連想が支配的になり、刺激語が名詞の場合は反応時間に関わらず範列連想が支配的な様式であることが見出された。村上 (1982) は反応語数と反応語の個人間の重なりを因子分析にかけることにより、被験者のタイプを5つないし7つに分類している。この研究では、41の刺激語に対し1分間の連続自由連想を使っている。山 (1986) は連続連想法 (一つの刺激語に10個の反応語を求める方法) を用い、コンプレックスを刺激する語とそうでない語への連想反応が異なることを見出している。最近では、足立 (2000) が言語連想検査で連想された反応語を論理的に分類した先行研究を概観した上で、言語連想の刺激語がどのような関係の連想語を引き出しやすいかを、大きく内的反応と外的反応に分けて分類している。また康 (1998) は非制限教示下の言語連想とロールシャッハ・テストとの関連から、連想スタイルのタイプを「刺激密着型」と「主体優位型」に分けて考察している。一方、前田 (1995) は、反応時間や再生率に影響を与える要因に関する研究をまとめ、刺激語に対する反応多様性を個人間と個人内に分けて分析している。以上のような連想過程の研究は、刺激語が連想過程に影響を与えることと連想過程に個人差があることを様々な観点から述べているということができようであろう。

言語連想検査を手段として用いた研究には、森谷 (1977) の研究がある。森谷は同音多義語を刺激語としたとき、健常群と病理群 (神経症群と精神病群) の間で反応が異なることを報告している。

すなわち、精神病群では刺激語の多義性に気づくことが少なく、神経症群が多義語の不安、衝動の意味に対して敏感であり、性的反応を回避し防衛しようとするのに比べ、精神病群にはそのような傾向が小さく、自我防衛の弱さが考えられると考察されている。足利・寺嶋・豊田（1997）は非定型精神病患者と統合失調症者に言語連想検査を実施・比較し、前者の現実指向性、対人関心の強さ、過剰な情緒刺激に対する感情・欲求統制の困難さを指摘している。また森鼻・氏原（1989）は摂食障害者の言語連想結果が一般女子大学生よりも多くの点でコンプレックス指標に引っかかり、その内容から摂食障害の自己犠牲的快感、装う自己、心的な侵入に対する防衛のまずさなどが見られたと述べている。塩見（1979）は内向・外向性の違いによって言語連想の反応に違いがあることを示している。珍しいところでは、田村・小川（1989）が土居健郎の甘え理論を基盤とした「甘え言語連想検査」を用いて、自己受容の高低群での依存のあり方について研究している。これら一連の研究では、何らかの精神的な症状や人格傾向によって、言語連想検査の反応に差異が生じることが示されている。

### （3）反応時間の遅延に関する諸研究の結果

ここで、先行研究の中から言語連想検査における刺激語と反応時間（以下RTと略す）の関係について、特にその遅延に関連する知見を中心にまとめておく。

ユング（Jung, 1905/1993）は刺激語の品詞がRTに与える影響として、具象名詞が刺激語のときにRTが最も短く、ついで形容詞、動詞そしてRTが最大になるのは一般概念（抽象）名詞であると報告している。ただしこの結果は被検者の性別や教養の有無によって異なり、教養のある男性の場合、具象名詞のRTが最大であった。そしてRTの長くなる刺激語の83%が感情語（情動語）で、17%は困難か不慣れによるものであったという。

森谷（1977）の研究では刺激語が一義語の場合より多義語の方がRTが長くなるという結果を得て

いる。また前田（1995）では、刺激語に対する反応多様性とRTは比例すると報告されている。

以上をまとめると、RTの遅延には以下の要因が関わっていることになる。①刺激語の品詞（具体名詞<形容詞・動詞<抽象名詞。ただし教養のある男性を除く。）、②刺激語の使用頻度、③刺激語の情動刺激性、④刺激語に対する反応多様性、⑤刺激語が保持する同音異義語の多寡（多義性）。ではなぜこれらの要因が遅延を引き起こすのだろうか。すなわち刺激語の諸特徴が、連想のいずれのプロセスを如何に阻害しているのかを考えねばならない。そこでこれらの要因が連想プロセスにどのように関わっているのかを、以下に整理して考えてみた。

まず、刺激語を聞いてから連想が行われるまでに、刺激語の意味をとる認知的過程があるはずである。この時に、⑤同音異義語が多ければ、語の意味を選択・確定させるための余分な処理が必要となる。また、②使用頻度が低い刺激語ならば、その概念を検索するのに時間がかかることになる。

このようにして刺激語の意味が見出されたならば、連想過程が始まる。この時に連想の処理水準がいわば“浅い”場合は語音連想などの言語運動反応、中程度では比較的一般的概念としての連想反応、そして“深い”場合は個人的エピソードを伴った連想反応が生じるであろう。ただし言語運動反応は連想過程そのものというより、意味内容の連想処理が行われなかった結果としての表面的な処理とも言える。ユングは疲労時や集中力が欠如した状態やコンプレックスが布置した時に、このような処理が生じることを、実験的に示している（Jung et al, 1904/1993）。そのため、通常の連想過程としては言語運動反応を除き一般概念の連想反応と個人的体験の連想反応の二つ<sup>4</sup>から考えたい。

①刺激語の品詞が抽象名詞の場合、あくまでそれが一般的概念として処理されればRTは短縮される。しかし連想が個人的エピソードとつながる傾

向が高い者（あるいは抽象概念に関して言語連合的な姿勢が顕著でない者）の場合、抽象名詞から具体的なイメージを連想し連想語を導き出すという過程にかなりのRTが費やされる。これが被検者の性別や学歴がRTに影響を与える所以ともなる。

③刺激語の情動価が高い場合、第一に感情的興奮自体が連想を阻害している可能性がある。第二に、情動が刺激されると一般的概念としての処理が難しくなり、個人的エピソードやそれに基づいた連想反応が生じてRTの遅延を引き起こすであろう。

反応多様性については、刺激語が一般概念として処理される場合に特に影響を与えるであろうと考えられる。なぜなら刺激語によってより個人的な概念連関が生起している場合、一般的な意味合いでの反応語の多さはさほど意味をなさないであろうからである。

#### (4) 本研究の目的

以上を踏まえて、本研究では本学における言語連想検査の実習授業で得られた各刺激語に対するRTのデータを分析し、先行研究と比較した上でその特徴について考察することを目的とする。本学で得られたデータが先行研究の結果と一致するのか、あるいは何らかの本学学生の特徴が垣間見えるのか、上記のRT阻害モデルを用いつつ、検討してみたい。

また、本学の実習では刺激語としてユングによる1908版と呼ばれる100の刺激語（刺激語の邦訳は河合（1967）に依拠した）を用いているが、戸川ら（1958）は時代や社会環境の違いによって、言語連想への（共通）反応が異なる可能性を指摘しており、それゆえユングが言語連想検査を研究していた時代・対象と現代・本学生では、それぞれに刺激として適した単語が（その用途も含めて）異なるであろうと推測される。そこで本研究と先行研究の結果の比較から、今後実習あるいは臨床で言語連想検査を用いる際に、どのような刺激語が適当であると考えられるかを再検討することも目的のひとつとする。

#### 方法

本研究は、本学における「人格検査法基礎実習」（2002～2003年）中に行われた言語連想検査実習に参加した2回生237名のデータを用いた。実習では学生がペアとなり、相互に言語連想検査を実施しあった。言語連想検査は以下のように実施された。教示：「これから私が言葉を一つずつ順番に読み上げます。その言葉から最初に思いついた言葉を、何でもいいですから、できるだけ早く言ってください。言葉は一つだけで結構です。」手続き：検査者は刺激語を一つずつ中立的に分かりやすい発音で読みあげた。そして反応にかかった時間（RT）をストップウォッチで測定し、反応語と共に記録した。ただし30秒を過ぎても反応がないときは、中止して次の刺激語に進んだ。これを刺激語100個（Table 1参照）について行った。<sup>5</sup>

#### 結果・考察

##### (1) 各刺激語のRTの中央値と四分位偏差

まず各刺激語について、全被検者のRTの中央値（Me）および四分位偏差（Q）を算出した<sup>6</sup>（Table 1）。これを前半50語と後半50語に分け<sup>7</sup>、それぞれのRTの中央値および四分位偏差の値の上位／下位約10語を表に示す（Table 2～9）。

それぞれの表から読み取られる特徴を以下に記すと、まずTable 2、すなわち前半50語のRT中央値の高かった刺激語は「33同情」「44軽蔑する」「42馬鹿な」など、情動を刺激しやすいと考えられる語であった。特にそこに絡んでいるのは対人間における否定的評価や、自尊感情に関わる情動であると推測される。続く「5死」「22怒り」「19誇り」も同類の情動刺激語と判断され、加えてこれらはそれぞれ「詩」「錨」「埃」といった同音異義語を連想しやすく<sup>8</sup>、そのためRTの遅延の効果があったと思われる。Table 2に含まれる刺激語群のもうひとつの特徴は、抽象名詞が多いことである。

Table 3は前半50語におけるRT中央値の低かつ

Table 1 刺激語（100語）のRTの中央値（*Me*）と四分位偏差（*Q*）

番号	刺激語	<i>Me</i>	<i>Q</i>	品詞*	情動刺激性**	番号	刺激語	<i>Me</i>	<i>Q</i>	品詞*	情動刺激性**
1	頭	1.7	1.1	nc		51	蛙	2.0	1.5	nc	
2	緑	1.5	0.7	na		52	別れる	2.3	2.0	v	aa
3	水	1.8	0.9	nc		53	空腹	2.7	2.7	na	
4	歌う	2.0	1.0	v		54	白い	1.8	1.3	a	
5	死	3.1	2.8	na	aa	55	子ども	1.7	1.1	nc	
6	長い	1.9	1.6	a		56	注意する	2.5	1.9	v	aa
7	船	1.8	1.2	nc		57	鉛筆	1.6	1.1	nc	
8	支払う	1.5	0.8	v	aa	58	悲しい	1.9	1.5	a	aa
9	窓	1.9	1.1	nc		59	あんず	2.6	2.1	nc	
10	親切な	1.8	1.4	a	aa	60	結婚する	2.4	1.9	v	aa
11	机	1.5	0.8	nc		61	家	2.1	1.8	nc	
12	尋ねる	1.7	1.0	v		62	可愛い	1.8	1.3	a	aa
13	村	2.4	1.7	nc		63	ガラス	1.6	1.1	nc	
14	冷たい	1.6	1.0	a	aa	64	争う	2.0	1.5	v	aa
15	茎	2.4	1.8	nc		65	毛皮	1.8	1.2	nc	
16	踊る	2.2	1.8	v		66	大きい	2.1	2.0	a	
17	海	1.8	0.9	nc		67	かぶら	2.8	3.0	nc	
18	病気	1.9	1.1	na	aa	68	塗る	1.8	1.4	v	
19	誇り	2.8	2.7	na	aa	69	部分	3.2	3.1	na	
20	炊く	1.8	1.0	v		70	古い	1.8	1.6	a	
21	インク	1.9	1.1	nc		71	花	2.1	1.6	nc	
22	怒り	3.0	3.0	na	aa	72	打つ	2.1	1.8	v	
23	針	1.6	0.9	nc		73	箱	2.6	2.0	nc	
24	泳ぐ	1.7	0.9	v		74	荒い	3.1	3.0	a	
25	旅行	1.9	1.7	na	aa	75	家族	2.6	2.5	nc	aa
26	青い	1.5	0.9	a		76	洗う	1.7	1.0	v	
27	ランプ	2.0	1.3	nc		77	牛	2.2	1.3	nc	
28	犯す	2.0	1.9	v	aa	78	妙な	2.5	1.9	a	
29	パン	2.0	1.7	nc		79	幸運	2.8	3.1	na	aa
30	金持ち	2.4	2.3	na	aa	80	嘘	2.7	3.0	na	aa
31	木	2.3	1.7	nc		81	礼儀	2.0	2.3	na	aa
32	刺す	1.9	1.2	v	aa	82	狭い	1.6	1.7	a	
33	同情	3.7	4.0	na	aa	83	兄弟	2.2	1.6	nc	
34	黄色い	2.2	1.7	a		84	怖がる	2.0	1.4	v	aa
35	山	1.8	1.5	nc		85	鶴	2.0	1.4	nc	
36	死ぬ	2.6	2.2	v	aa	86	間違い	2.5	2.2	na	aa
37	塩	2.0	1.4	nc		87	心配	2.9	2.9	na	aa
38	新しい	2.1	1.9	a		88	キス	2.9	3.1	na	aa
39	癖	3.3	4.0	na		89	花嫁	2.2	1.4	nc	aa
40	祈る	2.0	1.2	v		90	清潔な	2.6	2.2	a	
41	金	2.6	2.6	nc	aa	91	戸	2.3	2.0	nc	
42	馬鹿な	2.7	2.7	a	aa	92	選ぶ	2.9	2.5	v	
43	ノート	1.6	1.0	nc		93	草	2.1	1.7	nc	
44	軽蔑する	3.6	4.0	v	aa	94	嬉しい	2.5	2.6	a	aa
45	指	2.4	2.0	nc		95	あざける	3.1	4.5	v	aa
46	高価な	2.4	1.8	a		96	眠る	2.4	1.6	v	
47	鳥	1.6	1.0	nc		97	月	2.0	1.1	nc	
48	落ちる	2.2	1.8	v		98	きれいな	2.3	1.9	a	aa
49	本	1.5	1.0	nc		99	女	2.4	2.6	nc	
50	不正な	2.4	2.0	a	aa	100	侮辱	3.4	4.2	na	aa

\* 品詞はnaが抽象名詞、ncが具体名詞、aが形容詞、vが動詞。

\*\* aaの付された刺激語は、情動刺激性と判断されたもの。文末注9参照。

た刺激語が示されている。先のTable 2とは対照的に具体名詞がかなり含まれる。同時に、これらはいわゆる中立語と呼ばれる刺激語、すなわち通常は情動的な反応を喚起しにくいと考えられる刺激語群である。また、「8支払う」などは反応語の種類が「お金」など少数に限定されること、「11机」「49本」「43ノート」は、文具・教材などの概念群として共通しており、連想においてこれらの概念カテゴリーが活性化され反応しやすくなっていたこと（いわゆるプライミング効果）、などが可能性として考えられる。

Table 4と5はそれぞれ前半50語のRTの四分位

Table 2 前半50語のRTの中央値(Me)の高い刺激語

順位	番号	刺激語	Me
1	33	同情	3.7
2	44	軽蔑する	3.6
3	39	癖	3.3
4	5	死	3.1
5	22	怒り	3.0
6	19	誇り	2.8
7	42	馬鹿な	2.7
8	36	死ぬ	2.6
	41	金	2.6

Table 3 前半50語のRTの中央値(Me)の低い刺激語

順位	番号	刺激語	Me
1	2	緑	1.5
	8	支払う	1.5
	11	机	1.5
	26	膏	1.5
	49	本	1.5
2	14	冷たい	1.6
	23	針	1.6
	43	ノート	1.6
	47	鳥	1.6

偏差の上位および下位の刺激語である。これらはほぼ上記のTable 2と3の特徴と類似しているが、四分位偏差の低かった刺激語群は、中央値のそれとは少し内容が異なっている。ここでは「24泳ぐ」「3水」「17海」が一連の概念ネットワークとして連鎖しているようにも思われる。

Table 6は後半50語のRT中央値の高かった刺激

Table 4 前半50語のRTの四分位偏差(Q)の高い刺激語

順位	番号	刺激語	Q
1	33	同情	4.0
	39	癖	4.0
	44	軽蔑する	4.0
4	22	怒り	3.0
5	5	死	2.8
6	19	誇り	2.7
	42	馬鹿な	2.7
8	41	金	2.6
9	30	金持ち	2.3
10	36	死ぬ	2.2

Table 5 前半50語のRTの四分位偏差(Q)の低い刺激語

順位	番号	刺激語	Q
1	2	緑	0.7
2	8	支払う	0.8
	11	机	0.8
4	3	水	0.9
	17	海	0.9
	23	針	0.9
	24	泳ぐ	0.9
	26	青い	0.9

語群である。「100侮辱」「95あざける」「87心配」などは前半と同様に否定的意味を持ち情動を喚起させうると考えられる刺激語である。「あざける」は学生にとって日常的な使用頻度自体が低いようであり、中には「意味がよく分からない」と述べる者もいて、それらの知識的要因もRTの高さにつながっていると考えられる。ところが「69部分」と「74荒い」が、なぜ第2および第3番目にRTが高くなったのかについては、その理由が今一つ判然としない。「69部分」は抽象名詞であることも影響しているかもしれないが、反応語としては「全体」が大部分を占めている印象があり、その印象が正しければ反応時の選択性が相対的に低く、むしろ速やかに反応されRTが低下しやすくなる語と言えるはずである。また、「74荒い」は使用頻度の低さが関連している可能性しか指摘できない。この2語については、今後違った観点から分析するなどの検討が必要であろう。「67かぶら」は一部の被検者から「意味がわからなかった(「かぶ」のことを「かぶら」と言うことを知らない)」という反応があった。「88キス」も情動を強

く刺激する語のひとつと考えられるが、さほど否定的ニュアンスを伴わないためか、「100侮辱」「95あざける」「87心配」より下位になっている。すなわち、肯定的意味の情動語よりも否定的意味の情動語の方が遅延を起こさせやすいことがこの結果から推察される。

Table 7は後半50語におけるRT中央値の低かった刺激語である。やはり具体名詞や中立語が多く、前半との関係で言えば文具・教材に関連する「57鉛筆」がもっとも短い。「63ガラス」「55子ども」「62可愛い」は学校との関連で反応されているかもしれない。「62可愛い」などは、先行する刺激語群によって、つまりどのような概念群と結びついて連想されるかによって、RTの値がずいぶん変わることも予想される。

Table 6 前半50語のRTの中央値 (*Me*) の高い刺激語

順位	番号	刺激語	<i>Me</i>
1	100	侮辱	3.4
2	69	部分	3.2
3	74	荒い	3.1
	95	あざける	3.1
5	87	心配	2.9
	88	キス	2.9
	92	選ぶ	2.9
8	67	かぶら	2.8
	79	幸運	2.8
10	53	空腹	2.7
	80	嘘	2.7

Table 7 前半50語のRTの中央値 (*Me*) の低い刺激語

順位	番号	刺激語	<i>Me</i>
1	57	鉛筆	1.6
	63	ガラス	1.6
	82	狭い	1.6
4	55	子ども	1.7
	76	洗う	1.7
6	54	白い	1.8
	62	可愛い	1.8
	65	毛皮	1.8
	68	塗る	1.8
	70	古い	1.8

Table 8 および 9 の後半50語のRT四分位偏差の上位および下位の刺激語もほぼTable 6 と 7 に近い。「95あざける」の四分位偏差が最大になったのは、先述の通り、その意味が分からなかった

ため大幅に反応が遅れたか、全く反応できなかった被検者がいたためと考えられる。

Table 8 前半50語のRTの四分位偏差 (*Q*) の高い刺激語

順位	番号	刺激語	<i>Q</i>
1	95	あざける	4.5
2	100	侮辱	4.2
3	69	部分	3.1
	79	幸運	3.1
	88	キス	3.1
6	67	かぶら	3.0
	74	荒い	3.0
	80	嘘	3.0
9	87	心配	2.9
10	53	空腹	2.7

Table 9 前半50語のRTの四分位偏差 (*Q*) の低い刺激語

順位	番号	刺激語	<i>Q</i>
1	76	洗う	1.0
2	55	子ども	1.1
	57	鉛筆	1.1
	63	ガラス	1.1
	97	月	1.1
6	65	毛皮	1.2
7	54	白い	1.3
	62	可愛い	1.3
	77	牛	1.3

これらの結果から得た印象を統計的に確認するため、①刺激語の品詞別、②刺激語の情動刺激性の有無、によってRTに差があるか分析を行った。まず①刺激語を抽象名詞、具体名詞、形容詞、動詞に分け (Table 1参照)、各品詞のRT中央値 *Me* の平均値の差について一要因分散分析を行ったところ、有意差が見られた ( $F_{(3,96)}=9.41, p < .01$ )。多重比較 (TukeyのHSD) の結果、抽象名詞が他の品詞に比べて有意にRTの中央値の平均が高かった (Table 10)。次に②刺激語を情動語と非情動語に分け<sup>9</sup>、それぞれのRTの中央値の平均を求めて両者に差があるか t 検定を行ったところ (Table 11)、情動語の方が有意に平均値が高かった

Table 10 刺激語の品詞ごとのRT *Me* の平均

刺激語の品詞	抽象名詞 ( <i>n</i> =18)	具体名詞 ( <i>n</i> =39)	形容詞 ( <i>n</i> =20)	動詞 ( <i>n</i> =23)
平均RT <i>Me</i>	2.71	2.04	2.13	2.19
(SD)	(0.58)	(0.35)	(0.42)	(0.50)

\*\*  $p < .01$

Table 11 刺激語の情動刺激性の有無によるRTMeの平均

	情動刺激語 (n=36)	非情動刺激語 (n=64)	
平均RTMe	2.45	2.08	**
(SD)	(0.54)	(0.42)	

\*\*  $p < .01$ 

( $t = 3.57, p < .01$ )。すなわち、上述の特徴は統計的にも示されるものであったと言える。

### (2) 「死」と「死ぬ」のRTの差

ここで少し細かな点に着目したい。Table 2を見ると、「5死」と「36死ぬ」では名詞と動詞の違いはあるものの語の意味としてはかなり近いのにもかわらず、前者のほうがRTの中央値が0.5も高い。これには①「死」では「詩」など同音異義語による混乱があった②「死ぬ」の方が「死」よりも後に呈示されているためのプライミング効果が生じた③「死」が抽象名詞として(すなわち具体的・現実的でない抽象概念的なものとして)処理された、などの理由が考えられる。これらについてももう少し考えてみたい。

まず①同音異義語による混乱の可能性であるが、他の刺激語を見た時、同音異義語と情動喚起という二つの特徴を持つ「5死」「22怒り」「19誇り」よりも、「33同情<sup>10</sup>」「44軽蔑する」「39癖」などの刺激語の方がRTが遅れていることに注目したい。理屈としては「死」「怒り」「誇り」の方が情動刺激性と同音異義語保持というRT遅延の要因となる特徴を二つ持っており、「同情」などに比べてより中央値が高くなるはずである。が、実際は逆の結果となっている。もしかすると一定数の被検者が、「死」「怒り」「誇り」を完全に「詩」「錨」「埃」として聞き処理したために情動喚起によるRTの遅延が生じず、全体としてRTの中央値が抑えられたとも考えられる。すなわち情動刺激性と同音異義語の保持(刺激語の多義性)とを比較した場合、前者の方がRT遅延の効果が高い、という仮説が立てられる。その場合、「死」と「死ぬ」で前者のRTが高い原因に①同音異義語を持つため、と断定することは難しくなる。

次に②プライミング効果の生じた可能性についても、いくつかの反証材料がある。確かに、先行刺激語が中立語である場合にプライム刺激となることは示されているが、情動語同士の場合、たとえば「42馬鹿な(RTMe 2.7)」→「44軽蔑する(RTMe 3.6)」や、「95あざける(RTMe 3.1)」→「100侮辱(RTMe 3.4)」などでは先行刺激語によって後の反応が短縮されていない。もちろんこれら同士に「死」と「死ぬ」ほどの概念間のつながりがあるかは問題にされなければいけない。しかし、本来的に言語連想検査ではむしろつながりのある概念間に一定の情動が負荷した場合、それらがコンプレックス群として反応を阻害すると考えるのであるから、その理論に従うと「死」の後に「死ぬ」が呈示されたなら、「死ぬ」のRTが短縮されると単純には言えない。いま一つの問題点は、「5死」と「36死ぬ」の間には30の刺激・連想過程があり、そのように離れていて十分な影響を与えることがあるか、ということである。

③については、全体の結果からも一貫して支持されている理由である。つまり品詞としての特徴、すなわち刺激語が抽象概念であるか否かが大きくRTを左右する可能性が高いと考えられる。ただし「死」が抽象概念であり、「死ぬ」がより具体的であるとするには一考の余地はあろう。

### (3) 総合考察と今後の課題

以上、一連の結果をまとめると、以下の特徴が浮かび上がってくる。

- i) 先行研究と同じく、情動を刺激するような刺激語のRTは遅延する傾向がある。その中でも、「88キス」「60結婚する」あるいは「79幸運」などの比較的肯定的な単語よりも、「44軽蔑する」「100侮辱」「5死」「22怒り」「95あざける」といった否定的な刺激語の方がRTが高い。さらに、否定的な情動刺激語の中でも、「33同情」「44軽蔑する」「100侮辱」「95あざける」などの対人間で生起する否定的評価や自尊心感情に関わる単語への反応は特に遅延しやすいと考えられる。
- ii) 抽象名詞が刺激語の時にRTが高くなることは

ほぼ一貫している。

- iii) 同音異義語を持つ刺激語がRTを遅延させる可能性はあるが、むしろそれを持たない情動刺激語の方がRTが高い傾向がある。
- iv) 逆に、RTの低くなる場合は①刺激語が中立語（いわゆる非情動刺激語）である②具体名詞である③先に概念関連性の高い語が刺激語として用いられ、後の語にプライミング効果を起こす場合、などであった。ただし③については、ある概念群が活性化したときにその情動価が高いならむしろRT遅延の効果を持つ場合も考えられるので、今後検討が必要である。また、反応多様性に関してはRTを上昇させることを支持する結果もあったが、そうでないと判断される点もあり、これに関しても本研究では断言することは難しい。

結論として、RTに対して影響を及ぼす刺激語の特徴は、情動刺激性と品詞（抽象名詞か具体名詞か）の二点が主要であるということが言えるであろう。これが本学学生のような青年期女子を対象として言語連想検査を行った場合にのみ該当することなのか、より一般的な事象であるのについては検討せねばならない。とりわけ i) の「対人間で生起する否定的評価や自尊感情に関わる単語への反応遅延傾向」は、現代の青年期女子により強く見られる特徴のようにも思われる。

以上の結果を踏まえると、言語連想検査（殊に本学の実習）において刺激語を①情動刺激語と非情動刺激語、②抽象名詞と具体名詞、の二つの特徴を織り交ぜ、さらに①に関しては、どのような側面の情動に絡むものか、具体的には対人関係に関連するものか個人的な色合いが強いものか、肯定的か否定的か、などについて考慮して実施すると、新たに様々な知見が得られるのではないかと考えられる。今後この点に考慮してデータを採取し、分析を行ってさらに詳しく検討を加えたい。

## 引用文献

足立正道（2000）：言語連想検査における連想の

論理的分類について、京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 325-335.

足利 学・寺嶋繁典・豊田勝弘（1997）：言語連想検査における非定型精神病者の特徴, 心理臨床学研究, 15, 205-210.

Jung, C. G. (1905) : Über das Verhalten der Reaktionszeit beim Assoziationsexperimente. *Journal für Psychologie und Neurologie IV*. Leipzig. 高尾浩幸訳（1993）：連想検査における反応時間の動向について, 診断学的連想研究, 人文書院

Jung, C. G. mit Riklin, F (1904) : Experimentelle Untersuchungen über Assoziationen Gesunder. *Journal für Psychologie und Neurologie III*. Leipzig. 高尾浩幸訳（1993）：正常者の連想についての実験的研究, 診断学的連想研究, 人文書院

康 智善（1998）：刺激—反応間の概念的距離の次元からみた連想スタイルの研究, 教育心理学研究, 46, 317-325.

川幡政道（1979）：反応時間と連想の構造, 心理学研究, 50, 191 - 197.

河合隼雄（1967）：ユング心理学入門, 培風館

前田 潤（1995）：言語連想の基礎研究, 北海道大学教育学部紀要, 67, 173-193.

森鼻雅代・氏原 寛（1989）：摂食障害の人格特性について, 大阪市立大学生生活科学部紀要, 37, 177-188.

森谷寛之（1977）：同音多義語連想に関する臨床的研究, 教育心理学研究, 25, 1 - 9.

村上宣寛（1982）：語連想における被検者タイプと反応スタイル, MMPIとWAISの下位尺度との関連性について, 心理学研究, 53, 23 - 30.

Samuels, A. (1985) : *Jung and The Post-Jungians*. Routledge & Kagen Paul. London. 村本詔司・村本邦子訳（1990）：ユングとポスト・ユングアン, 創元社

Samuels, A., Shorter, B. & Plaut, F. (1986) : *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*. Rout-

ledge & Kagen Paul. London & Newyork. 山中康裕監訳 (1993) : ユング心理学辞典, 創元社  
 塩見邦雄 (1979) : 外向性-内向性次元における言語連想反応語の相違についての研究, 鳥取大学教育学部研究報告, 教育科学, 21, 121-132.  
 Stevens, A. (1994) : *Jung*. Oxford University Press. 鈴木晶訳 (1995) : ユング, 講談社  
 田村富美代・小川捷之 (1989) : 自己受容と対人関係, 横浜国立大学教育紀要, 29, 87-103.  
 戸川行男・倉石精一編 (1958) : 連想検査法, 白亜書房  
 山 愛美 (1986) : 連続連想に見られる反応パターンの特徴, 心理学研究, 57, 287 - 292.

- 1 ここでいうコンプレックスとは, 日本で一般に理解されているような劣等感の意味ではなく, ある一定の情動を帯びた観念群の連合を指す。本文中で記されているコンプレックスの意味はすべてこれである。
- 2 刺激語の意味ではなく音韻によって生じたと考えられる連想。例えば刺激語「人間」に「インゲン」と反応するなど, 語呂合わせがこれにあたる。
- 3 客観的タイプでは刺激語が客観的に把握され, 主に客観的な意味・言語的な刺激として理解される。一方, 自我中心的態度では刺激語が主観的に把握される (Jung, 1905/1993)。
- 4 これは先に述べた客観的タイプと自我中心的態度の連想スタイルに相当する。あるいは記憶における宣言的記憶とエピソード記憶に対応するであろう。
- 5 なお, 実習ではこの後に再生段階・質問段階があったが, 本研究では扱わないため割愛した。
- 6 算術平均や分散を用いないのは, コンプレックスに触れた際にRTが突出して高くなるため, 平均を代表値としては不適切と考える多くの先行研究に倣ったものである。
- 7 一般的に言語連想検査では, 後半になるに従って反応が遅延する傾向が見られるため, RTの分析は前半と後半に分けて行われることが多い。よってここでもその慣例に従った。
- 8 実際, 一定数の被検者がこれらの語と判断して反応している。一方で「同情」を「同上」「道場」などとして反応した例は, 実習上でほとんど見当たらなかった。
- 9 情動語と非情動語の分類は, 28名の女子大学生にTable 1の100の刺激語すべてについて, 「一般に感情を刺激する語であると思うか」を質問紙 (「全く感情を刺激しない」0点~「非常に感情を刺激する」4点, の5件法) によって問い, その結果平均が2.5点以上の語を情動語として判断した (Table 1参照)。
- 10 先に述べたように, 「同情」にはいくつかの同音異義語があるが, 検査施行上でそれらの異義語と混同されることは極めて少なかった。